全ての服が溶かされた後、ハマドは赤緒に襲いかかった。
拘束され、そのうえ液体のせいで体力を消耗している今の赤緒は、ハマドにとっては赤子も同然だった。
強引に股を開かれ、露になったハマドの剛直が近づく。
赤緒は力一杯に抵抗するが、モノは容赦なく赤緒の恥部に迫る。

バッ
イヤアッ！
嫌あああッ!!
バッ
グッグッ

ああ…ッ
かは…ッ！
くあ…ッ！
ガち…
ガち…
グイ…

ああああッ！
んあ、はあ…ッ！
ああああっ！
ガッ
ガッ

赤緒の抵抗も虚しく、ハマドのモノが
処女膜を貫いた。
経験したことのない感覚、出血…
赤緒はそれが何を意味しているかを
知っていた。
倒すと決めた宿敵に犯される。大切な
ものが奪われる。
屈辱と恐怖に赤緒は戦慄し、絶叫する。
しかしそれは助けの来ない部屋でただ
虚しく響くだけだった。

ハマドは躊躇うことなく腰を動かし
赤緒の深部にモノを打ち付ける。
その度に赤緒の身体は弾み、美しく大
きい双丘が揺れる。
恐怖に染まった赤緒の悲痛な声は、ハ
マドの耳に心地よい旋律となって届く。
それはさらにハマドの加虐心を震わせ、
自慢の肉棒の張りがより強くなった。

ああッ、ああ！
イヤあ…ッ！
んあ、はあッ！
あんッ！
んんッ、ああああッ!!
ブルンッ
ブルンッ
ゲンッ
ゲンッ

はぁ
はぁ
ああ、んんあッ！
い、嫌ああ！
あんッ！
はんッ、あああッ！
ああんッ！いや…ッ！
はぁ
はぁ
もみ…
ガッ
ガッ
ぐちゅ
ぐちゅ

激しく乱暴な責めの後、ついに射精が開始された。
ハマドの快楽の果て、情欲の熱い塊が放出され、それは勢いよく赤緒の膣内を埋め尽くしていく。
下腹部に広がる熱い感覚。
愛してもいない、憎悪しかない相手の精液が自分に入ってくる。
その現実に、絶望に、赤緒の心は闇に堕ちていく……

ハァハァ…
ハァハァハァハァ…
ハァハァ…
ハァハァ…
ドクドク…

激しい射精の後、ハマドは肉棒を引き抜いた。
赤緒の膣内に収まりきらなかった精液が溢れ出て、ゆっくりと垂れていく。
やっとの解放。しかしふと目をやると、ハマドのモノは尚もいきり立ち、剛直を誇示したままだった。
それはこの悪夢が未だ終わっていない事を示していた。